

天草キリシタンの成立と展開

— 16・17世紀の羊角湾域を中心に —

平岡隆二

はじめに

キリスト教が初めて日本に伝来した16世紀中葉から、江戸幕府の禁教政策によって布教活動が事実上終結した17世紀中葉までのおよそ1世紀の間、天草下島の羊角湾口に位置する崎津・今富地区と、湾奥の河内浦においては、日本とヨーロッパの交流史上において特筆すべき異文化の接触と受容が行われた。本稿では、この時代の天草キリシタンについて、その主たる情報源である西洋側の諸史料（ポルトガル語、スペイン語、イタリア語、ラテン語）に基づいて検討してゆく。第1章では、羊角湾域を中心とする天草教界の成立と展開について概観し、とくに河内浦に設置されたイエズス会コレジオが日欧文化交流上に果たした役割について取り上げる。また第2章では、同地域に現存するキリシタン遺物とその関連文献を紹介し、後の潜伏期への信仰の継承を理解する上での一助としたい。

1. 天草教界の成立と展開

1-1. キリスト教の伝来 1566～1589

天草へのキリスト教の伝来は、永禄9年(1566)に志岐鎮^{しげつね}経(麟泉。?-1589)がイエズス会を招来したことに始まる。鎮経は、当時天草に割拠した天草五人衆(志岐氏、天草氏、栖本氏、上津浦氏、大矢野氏)のひとつ志岐氏の当主で、イエズス会宣教師ルイス・フロイス(Luis Frois, 1532-1597)が著した『日本史』によると、彼のイエズス会への接近は、ポルトガル船との貿易による利潤の獲得にあった¹。

当時のキリスト教布教は、ポルトガル船による南蛮貿易と不可分の関係にあったため、とくに貿易の拠点となった九州の西海地域においては、大きな富をもたらす南蛮船の入港のために宣教師を自領に招き、布教を求める領主が相次いだ。鎮経は肥前の有馬氏や大村氏と姻戚関係にあったため、すでに自領への南蛮船入港を果たしていた彼らからも、大いに刺激を受けていたに違いな

い。

羊角湾への伝来

ほどなくして、天草五人衆のうち羊角湾奥の河内浦を居城とする天草氏も交易を望み、その結果、永禄 12 年 (1569)、イエズス会のルイス・デ・アルメイダ (Luis de Almeida, 1525?-1583) による布教が開始された。アルメイダは、当時九州各地を巡回布教して大きな成果を挙げた宣教師だった。彼は河内浦開教にあたって、当主・天草鎮尚^{しげひさ} (生没年不明) 自らが説教を聞き、教えが立派であると思ったら息子の 1 人に洗礼を受けさせ、キリシタンたちがその人物を頭目に頂くこと、また適当な土地を提供して教会を建てることなどの条件を示し、それが受け入れられて初めて説教を開始したという²。さらにフロイスによると、天草氏は将来の南蛮貿易を見越して、河内浦にほど近い崎津港にアルメイダを案内していた。その内容は、崎津におけるキリスト教宣教師の足跡を顕す最初期の記述の 1 つとして、大きな注目に値する。

修道士 [=アルメイダ] はこの地でも同様に、人々はできうるならば数艘のポルトガル船を自分たちの港に来させたく願っている事を知ったので、彼は先ず彼らの (希望する) 門から入りこんで、その後自分自身の (望む門) から出ようと思った。そこで彼は、インドから (来る) 船を迎え入れる事が出来るかどうか調べるために、どのような港があるか見せてもらおうと言った。人々はさっそく彼に一寒村で崎津 Saxinoccu という港を見せ、同時にその港の上の山も見せた。殿が言ったように、そこは、商品や船舶や商人の安全をはかるため、一城を築き得るところであった³。

その後の羊角湾域では、元亀 2 年 (1571) に日本イエズス会の新しい上長フランシスコ・カブラル (Francisco Cabral, 1529-1609) が河内浦で天草鎮尚に受洗し (洗礼名ミゲル)、さらにその 5 年後には嗣子・久種も受洗 (洗礼名ジョアン)⁴ した。それによって河内浦は天草における布教活動の重要な拠点として発展してゆく。たとえば天正 6 年 (1578) 10 月 16 日付のフロイス書簡では、

肥後国の天草地方には司祭 3 名と修道士 1 名がおり、ドン・ミゲル (天草鎮尚) と称する殿の所領は今やことごとくキリシタンになっている。教会が多数あり、司祭らは同地のキリシタンを教化し、諸聖儀を執り行う機会

がはなはだ多い。通常、人々は信心篤く、告白の秘蹟を好み、たびたびこれを行う。彼らはよく悟っており、デウスに対する畏敬の念と聖なる奉仕にかけける熱意がその良き進歩に少なからず寄与している⁵。

と、伝道の広がりや信徒らの信心深さについて報告している。鎮尚・久種父子の受洗は、やがて他の領主にも波及し、大矢野・栖本・上津浦氏も相次いで改宗するに至った⁶。こうして天草全島にキリスト教が伝播する地歩が固められた。

レジデンシアと信仰の広がり

この時期の天草で成立した重要な布教施設にレジデンシア（住院）がある。これはイエズス会が布教地の各所に設けた、宣教師が定住できる施設のことで、周辺に付属の聖堂や教会を持つことで、ミサを挙げたり秘蹟を授けたりする場を提供した。

天草のレジデンシアは、はじめ志岐に設けられたが、伝道の拡大にともなって河内浦や本渡にも設置され、キリシタンの信仰生活の拠点となった。とくに1580年代から90年代にかけてレジデンシアが設置された地域には、久玉、佐伊津、大矢野、栖本、上津浦の多数を数えることができ、天草諸島のはほぼ全域に設置されたことになる。それらが管理する信徒数も年を追って増加したようで、イエズス会の調査では、

天正8年(1580)： 9千～1万1千人(天草氏領8千～1万、志岐1千)

天正11年(1583)： 1万6千人(天草1万5千、志岐1千)

文禄元年(1592)： 2万3千人(天草)⁷

と推計されている。かつてイエズス会日本布教の責任者として来日した巡察師ヴァリニャーノ(Alessandro Valignano, 1539-1606)は、天正8年(1580)に執筆した『東インド巡察記』において、以下のように天草教界の将来への期待を表明していた。

天草は五人の領主が治める一つの島である。この五人の中で、最も有力な領主は天草殿で、彼も、また彼の[治める]全領民もキリスト教徒である。[中略]もし、この五人の領主たちが改宗するに至るなら、天草島は非常

に堅固で安定したキリスト教界となり、日本に見られる数々の戦争や騒乱の只中にあっても、このキリスト教界からは多大な至宝が生み出されるであろう⁸。

けだし巡察師によるこの見通しは、後の興隆を的確に預言するものだったと言えよう。

1-2. 小西行長の入国とコレジオの活動 1589～1600

天正天草合戦（1589年）と小西行長の入国

天正17年（1589）に起こった天正の天草合戦は、その頃天下統一を推し進めていた豊臣秀吉に対して、天草五人衆が反抗して立ち上がったものである。その鎮圧には、秀吉から天草を含む肥後国南半分の統治を命じられていた小西行長（1558?-1600）と、北半分の統治を命じられた加藤清正（1562-1611）があたった。その結果、同年11月には行長・清正両軍により一揆は制圧され、天草全島は名実ともに行長のもとに服属するにいたった。

以上のような政治的混乱にも関わらず、イエズス会の天草布教はその後も隆盛を維持するが、それは行長自身がアゴスチノの洗礼名を持つキリシタンであり、またその家臣として天草支配に当たった志岐城代の日比屋了荷（兵右衛門。1554-?）も、ヴィセンテの洗礼名を持つキリシタンであったことに拠るところが大きい。とりわけこの時期、河内浦に移転してきたイエズス会のコレジオは、天草の各レジデンシアとその付属教会群を統括する拠点となっただけでなく、日本と西洋の学問、思想、文化のはじめての出会いに大きな役割を果たした。

天草のコレジオとキリシタン版

コレジオは、イエズス会が次世代の日本布教を担う司祭（神父）や修道士を養成するために設置した高等教育機関で、天正9年（1581）に豊後府内（現・大分県大分市）に創設された後、各地の戦乱等を避ける形で、山口、生月（長崎県平戸市）、長崎、千々石（同県雲仙市）、有家（同南島原市）、加津佐（同）と移転を繰り返し、天正19年（1591）に、対岸の天草・河内浦に移転された⁹。

コレジオでは日本人や外国人の学生に対して、キリスト教信仰の基礎となるラテン語や哲学、科学といった西洋の学問が教えられただけでなく、信徒への説教や僧侶との討論のために必要な日本語・日本文学の知識、また仏教の素養

なども教授された。またコレジオは、各地のレジデンシアをその管轄下に置く、天草教界の布教拠点でもあった。1596年のイエズス会年報では、修道士たちの学習の様子や、またコレジオが管轄する近隣の教会—その中には崎津・今富も含まれたであろう—to彼らが派遣され、布教活動に従事していたことを伝えている。

[河内浦の] コレジオの中では、(イエズス) 会で習慣になっている秩序が守られている。日本人の修道士たちに対しては、人文課程の講読やカトリックの信仰に関する『[講義] 要綱』を読み了って後に、仏法と言われている日本人たちの諸宗派や誤謬についての書物が課せられる。それは(日本人修道士) たちが、毎日仏僧や他の異教徒たちと行う討論に際して、彼らを反駁することができるようになるためである。また外部の人々と交際するのに必要な事柄となっている、日本の諸々の書物を読み、また人格を形成する道理が伝えられる。コレジオのこれら修道士たちは、それぞれに割り当てられた受け持ちの村をもっており、そこへ定期的に赴いて人々にキリシタンの教理を教え、またこの練習によって自分たちの来るべき説教に備えているのである。[中略] このコレジオの管区では、2600名の告白が聞かれ、104名の大人が受洗し、また幾つかの教会が新しく建築された。(コレジオから) 9000ないし10000歩離れた諸々の地は我らの少なからぬ労力によって司牧されている。なぜなら道は非常に険阻な坂道を通って行かねばならず、またその地自体が互いに非常に遠く隔たっているからである¹⁰。

またコレジオには、ヨーロッパから運ばれた西洋の活版印刷機も設置された。そこではヨーロッパ製の洋活字だけでなく、日本において独自に開発された日本字の活字によって多くの書物が刊行され、それらはキリシタン版と呼ばれている。キリシタン版は、日本における金属活字による出版の最初であるだけでなく、16世紀の日欧文化交流史においてとりわけ重要な役割を果たしたことが広く知られている。

とくに天草のコレジオとキリシタン版(天草本と呼ばれる)が果たした役割と意義については、以下の2点を挙げることができよう。

まず第1に、天草コレジオは、西洋の科学や哲学が日本ではじめて本格的に教授された場であった、ということである。戦難を避けるため、創設後も移転を繰り返したコレジオでは、安定した教育環境とカリキュラムの整備が難航し

た。とりわけ宣教師らは、キリスト教信仰の基礎となる西洋の学術知識を、日本という布教地に適合する形にまとめた教科書を作成することが重要と考えたが、その編纂も遅々として進まなかった。しかし比較的平穩だった天草に移転してからは、そこで得られた閑暇と時間的余裕によって作業が進展し、文禄2年(1593)には日本のコレジオのために独自に編まれた教科書『講義要綱』が完成し、すぐに講義に用いられたのである(上掲注10の引用参照)。

この日本初の西洋式教科書と言うべき『講義要綱』の執筆にあたったのは、当時の日本準管区長ペドロ・ゴメス(Pedro Gomez, 1533/35-1600)で、その現存唯一のラテン語本がヴァチカン図書館に、またその邦訳本がオクスフォード大学モードリンカレッジにそれぞれ残されている。ゴメスは来日イエズス会士随一の学者で、かつてはポルトガルのコインブラ大学で哲学や神学の教授にあたった経歴の持ち主である。『講義要綱』は3部構成で、(1)西洋宇宙論(天文学・気象論・物質論)の教科書である『天球論 *De sphaera*』、(2)アリストテレス哲学に基づく『靈魂論 *De anima*』、そして(3)神学に関する『神学要綱 *Compendium catholicae veritatis*』からなる¹¹。当時受講者の1人であった伊東マンシヨ(1569頃-1612天正遣欧使節の一人)は、ローマのイエズス会総会長宛ての書簡で、以下のように伝えている。

少なからず助力であったのは、天草のこのコレジオで、ある様式で『神学要綱』の課程を行っていることです。それは当地方において必要なものとしてよく適応しております。それは、本年準管区長のパードレ [=ゴメス] が自ら明快で理解しやすい文体で作成して始めたもので、ラテン語でも日本語でも私たちに十分に説明できる1人のパードレ [=ペドロ・モレホンのこと] を教師として私たちに宛てくれました¹²。

この『講義要綱』は、西洋の科学や哲学などの学術知識を、はじめてまとまった形で日本に紹介した書物と言うことができ、後の蘭学や、さらには明治政府による西洋式学問の全面的な導入にはるかに先立つ先駆的な事例として、日欧文化交流史上に特筆すべき位置を占めている。

第2に、天草コレジオは、西洋人による日本語研究の成果がはじめて本格的に出版された場でもあった。キリシタン時代の日本人にとって、はじめて出会う西洋の言語や学術を理解することが困難であったのと同様に、当時来日した西洋人にとっても、日本人の話す言葉やものの考え方を理解することは、著し

く困難なことであった。元亀2年(1571)に天草氏に洗礼を授けたフランシスコ・カブラルは、宣教師にとって日本語習得が大変困難であることを、強く指摘していた。

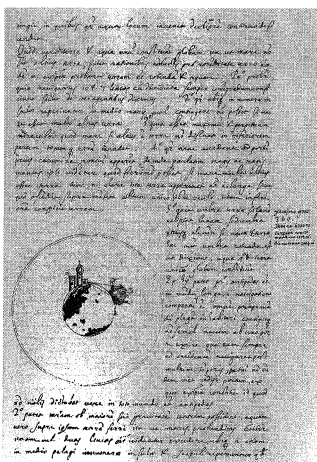


図1. ヴァチカン本『天球論』

告解を聴くこと(聴罪)と説教がおもな要務であった西洋人司祭にとって、この言葉の壁がどれほど高く立ちはだかったかは、容易に想像できよう。

日本語の習得のために、来日宣教師たちはさまざまな研究を行った。とりわけ辞書をはじめとする語学書を編纂した上で印刷に付すことは、手で書き写すための膨大な時間を節約するためにも、また組織的かつ体系的な学習を進めていくためにも重要であった。そうして編纂されたキリシタン語学書を初めて印刷することに成功したのが、天草コレジオにおいてなのであり、それらは西洋人による本格的な日本語研究成果の、史上はじめての出版でもあった。

具体例を挙げると、たとえば西洋人の手による初の本格的な日本語辞書『羅葡日対訳辞書』(1595年)は、当時ヨーロッパで多数出版されたラテン語辞書「カレピーノ」をもとにしたもので、ラテン語の見出し語に対して、ポルトガル語および日本語の訳語を付したものである。この辞書は、説教のための辞書とも言われ、ヨーロッパ人宣教師らによる日本人への説教の原稿作りにとくに利用されたことで知られる¹⁴。

また同じく天草で出版された『平家の物語』(1592年)、『エソポのハブラス』(1593年)、『金句集』(1593年刊)も、宣教師が説教用語の学習を段階的に進め得るよう体系立てて編纂されたもので¹⁵、この種の書物としては、計30数種を数えるキリシタン版の中でも最初期に属する。さらに天草コレジオでは、

文法を学び、また学習することによって、それほど容易に〔キリスト教を〕教えられると思っているのは、日本語を知らないからである。なぜなら、才能ある者でも告解を聴けるようになるのは少なくとも6年はかかり、キリスト教徒に説教することができるには15年以上を要する。異教徒に対する本来の説教などはまったく考えられないことである(1595年11月23日付、ゴア発信書簡)¹³

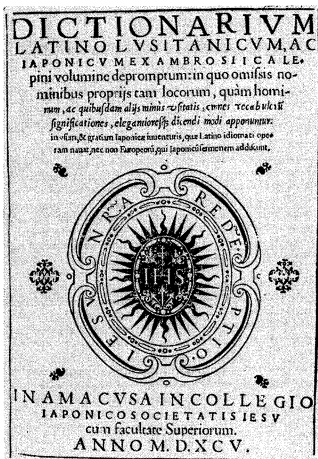


図2. 天草本『羅葡日対訳辞書』のタイトルページ
(勉誠社 1979 年刊複製より)

日本イエズス会が刊行した初の文法書で、ラテン文法の枠組みで日本語文法を素描した『ラテン文典』（1595 年）も出版されるなど、キリシタン日本語研究の初期の成果が勢揃いした感がある。

以上のように天草コレジオにおいては、日本と西洋の初めての出会いを象徴する、数多くの貴重な文化遺産が生み出されたが、それらは地域の歴史・文化を理解するためはもとより、今日まで続く東西の文化・思想交流の始まりを記録した史料としても、重要な価値を有するものである。それらはいずれも天草コレジオが当時の日欧交流の最重要拠点の 1 つであったことを裏付けており、羊角湾域の教界の歴史的意義を

考える上で、特筆すべき点と言える。

1 - 3. 寺沢領から天草・島原の乱へ 1601 ~ 1638

寺沢領となる

キリシタンの擁護者であった小西行長は、慶長 5 年（1600）の関ヶ原の戦いで敗死した。その所領の天草は、初め加藤清正に、ついで唐津城主・寺沢志摩^{ひろたか}守広高（1563-1633）に宛行われることとなったが、そのことはキリシタンの信徒らにも大きな影響を及ぼした。寺沢のキリシタンに対する態度は、時勢によって擁護と迫害の両極を揺れ動いており、画一的な像を描くことは難しい。しかしイエズス会が寺沢のことを「邪悪な異教徒で、キリストの御名の不俱戴天の敵」¹⁶と呼んだように、その治政の始まりから天草・島原の乱（1637-38）へ向けての天草教界は、規制から迫害の時期へと進んだ。

コンフラリアの成立

寺沢が天草に入った慶長 6 年（1601）に前後する形で、天草のキリシタン社会で起こった特筆すべき出来事として、コンフラリア（信心会、兄弟会、講などと訳される）の成立を挙げなければならない。コンフラリアは、キリシタンの平信徒によって組織された信仰共同体で、日本では文禄元年（1592）以降、各地に設立を見た。フロイスによると、同年肥前の大村には 3000 人近い人が加

わったコンフラリア *confraria ou congregação* があったという¹⁷。

天草においては、慶長元年（1596）、志岐において初めてのコンフラリアが組織され、そこでは上述のヴィセンテ日比屋ノ荷が自ら組親となり、地位の高い人々が世話役となって、貧しい人々に施米していた¹⁸。また同年中には志岐にほど近い二江に「聖母のコンフラリア *Beatissimae Virginis Confraternitatem*」が設立された¹⁹。さらにこの動きは他の村々にまで広がっていたようで、フロイスは1596年の年報で、以下のように報告している。

他の大きな村では、まだ心の底から偶像崇拜への信心を一掃しきれないでいる人々がいた。しかし彼らの心を、我らの「主のコンフラリア *Confraternitati Domini*」に名を連ねたいという望みがとらえるようになった時、既述のような謬見は彼らの眼から取り除かれてしまい、或る人々は山々の洞窟から、或る人々は自分の小さな室からおよそ20体の仏像を持参して、自分の罪を認めて皆の面前で火に投げ入れた。聖主の御昇天の祝日〔その日はコンフラリアの最初の祝日であった〕には、400名がその会に名を連ねた。そしてこの祝日をいっそう荘厳な儀式と行列をもって祝うために、学院長師はコレジオから数名の修道士たちを遣わして、彼らにミサ聖祭の時に楽器を奏して歌わせた。殿〔=日比屋ノ荷〕は家族全部と他の大勢の人々といっしょに告白をし聖体拝領をした。各地から大勢の人々が詰めかけて、それぞれの風習に従って音楽を合奏させたりしながら、それぞれに祝福しあった。その日には500名以上の貧しい人々に食事がふるまわれた²⁰。

これらのコンフラリアの活動内容や指揮系統の詳細については不明な点が多いが²¹、迫害のさ中であって、その存在は信仰の維持に大きく寄与したものである。慶長9年（1604）には寺沢による迫害が激化し、司祭らが常住している2つの教会（志岐と上津浦）以外のすべての教会を破壊するか、他の用途に供するよう命じた²²。しかしそのような状況下においても、以下のように信徒らは、教会の代替家屋においてコンフラリアと思しき集会を行っていたようである。

殿〔=寺沢〕の代官を刺激しないように外部はそれと明らかでないが、教会のような広々とした家を建てたので、訪れたパーデレは都合よく祭典を行い、秘蹟を授ける事ができた。又信者等はそこで会合 *congregationi*〔=コ

ンフラリア] をひらくこともできた²³。

崎津において、コンフラリアがいつ頃設立されたかは明らかではない。しかしペドロ・モレホンの『日本殉教録』は、崎津で看坊（信徒への教理伝授や洗礼に携わった役）として働いていたソテロ・クンド（工藤）について、以下のように記している。

崎津 Saitzu とその周辺に於いて日夜働いて努力したので、棄教した人々の内 500 人が教えに戻り、多数の異教徒、特に、その地の支配者の妻が改宗した。すでに信仰の厚い人々を援け、会合やコンフラリア confrades、及びパーデレの定めて行ったその他の手段を実行して人々を励ました²⁴。

ソテロ・クンドは、慶長 19 年（1614）に対岸の島原・口之津で殉教しているため、彼が関わったという崎津のコンフラリアも、少なくとも 17 世紀初頭には成立していたことになる。崎津では、慶長 11 年（1608）に初めてレジデンシアが設置され、同 16 年（1611）頃まで存続していたため、その活動はコンフラリアとも密接な関係にあったに違いない。しかし慶長 19 年（1614）に本格化したキリシタン弾圧により、天草のみならず、全国の宣教師とキリシタンをめぐむ状況はきわめて厳しいものとなった。

強まる迫害と天草・島原の乱

徳川幕府によるキリシタン弾圧は、天草においても過酷を極めたが、各地に潜伏・巡回していた宣教師たちと信徒との結びつきはなお緊密なものがあつたようである。1615、1616 年度の日本年報には、以下のように記されている。

肥後の国には、志岐、天草、上津浦、大矢野など寺沢志摩殿に従っている島々が付属している。この島々に靈魂の救いを伝える役目を担っていた 1 人の司祭が、苦勞しながら身を隠すための隠れ家を見つけることに成功した。[中略] この司祭たちの不安は、善良なキリシタンたちを見出し、彼らが堅固な徳を保ちながら日々を過ごし、（人々が衆知のように）迫害という霜の間で厳しい献身という花がキリシタンたちの間に花咲くのを見ることによって慰められた。司祭がいずれかの土地にいと、その場所へと勤勉にも 10 里も 12 里も離れた土地から、善良なキリシタンたちが群れをな

して雪や氷を踏みしめながらやって来ては、(司祭に向かって) 彼らの土地にも足を踏み入れるよう懇願する。彼らの多くは、迫害によっていっそう信仰が強固になり、永遠の救いを求める気持ちも強くなっている²⁶。

この時期の崎津における信徒組織の存在を記した貴重な記録に、元和3年(1617)のいわゆる「コーロス徴収文書」がある。同文書は、当時イエズス会と同じく日本に潜入・布教していた托鉢修道会のフランシスコ会が、日本人信徒に対する義務を放棄しているとイエズス会を批判・非難したことに対抗するため、イエズス会日本管区長のマテウス・デ・コーロス(Matheus de Couros, 1567?-1632)が各地の指導的なキリシタンの証言を集めてローマへ発送したものである。天草については上島分(上津浦村と大矢野村)と下島分(北部から西目の諸村にわたる)の計2通が残されている。とくに後者から、崎津、今福(今富)、大江村の署名者を抜き出すと、以下のとおりである。

Imabucu Vōyaxiqi Ficosaburō Miguel	今福	大屋敷彦三郎	ミける(花押)
Saxinotcu Matcunaga Jibuzayemō	崎之津	松永治部左衛門	味け留(花押)
Vonajiqu Noda Guenbazayemō Paulo	同	野田玄蕃左衛門	はう路(黒印)
Vonajiqu Matcunaga Nijiōye Antonio	同	松永二兵衛	阿ん当仁(花押)
Vōye Acasaqi Magoyemō Esteuão	大江村	赤崎孫右衛門	ゑすてわん(花押)
Vonajiqu Baba Qisuqe Diogo	同	馬場喜介	了五(黒印)
Vonajiqu Tanaca Josuqe Christovão	同	田中広介	きりしとわん(花押)
Vonajiqu Catcuqi Yozayemō Pedro	同	香月与左衛門	平と路(花押)
Vchida Suqefachirō Mathias		内田助八郎	町安 ^[ママ] (花押) ²⁷

いずれも各村を代表するキリシタンと考えられるが、とりわけ崎津の松永治部左衛門(味け留)は、1629、1630年度日本年報に殉教者として名前が見える「ミゲル治部左衛門」と比定され、崎津のコンフリリアにおいて中心的な役割を果たした人物であったにちがいない。

迫害は崎津でも起こった。そこで心弱き者に対し、ミゲル治部左衛門 Michele sybuzaiemone の志操堅固さは華々しい光栄を示した。彼は神の光栄を示す敬虔さで熱心さの故にキリシタンの頭であり、父として敬われていた。彼はよく戦い、水責めで脅かされた。最後に嚴重に縛られたまま吹き晒しの牢獄に入れられた。羽織った着物は雨でびしょ濡れになっ

た。新たな着物に着換えるように勧めても着換えようとはしなかった。しかし、さまざまな戦いに打ち勝った彼は、1630年12月20日に安らぎと喜びに満ち溢れ、70年の生涯をもって海に投げられた(1629、1630年度日本年報)²⁸。

寛永14年の末から同15年(1637-1638)初頭にかけて勃発した天草・島原の乱は、江戸幕府によるいわゆる「鎖国」体制の確立を決定づけた重要事件として有名であるが、天草から乱に参加したのは、上島・東目の農民たちで、下島・羊角湾域の住民らは参加しなかった²⁹。ともあれ乱後の宗門改めは厳戒を極め、寛永15年(1638)3月18日には、乱に参加しなかった崎津・今富近辺の集落においても、総勢35人のキリシタンが摘発され(崎津村男女16人、今留村5人、小嶋村3人、主留村1人など)、富岡に送られて斬首されている³⁰。

その後、羊角湾域のキリシタンたちは潜伏を深くし、その存在が再び記録に現れるのは、文化2年(1805)の天草崩れにおいてのこととなる³¹。

2. 初期布教期の信仰形態と現存遺物

初期布教時代における天草キリシタンの信仰形態について、その全容を明らかにするためには、現状の史資料はあまりにも限定されている。この問題に関する日本側の同時代記録は事実上皆無であり、主たる源泉である欧文記録についても体系的な記述を確認することができない。前出のコンフリリアに関して、天草上島の上津浦村・大矢野村についてはその役職や指揮系統について知る手がかりがあるが³²、羊角湾域については具体的な記述に乏しく、類推の域を出るものではない。

ともあれ宣教師らの残した欧文の書簡や年報からは、当時の信徒らの習俗や個々の信仰のあり方について、断片的ながらも豊富な情報を得ることができる。またそれらを現存する遺物と照らし合わせることで、初期布教期の信仰形態について推察することが可能となる。文化元年(1805)の天草崩れで発覚した信仰内容の多くが、初期布教期の信仰に起源することは確実であり、当初の様相の理解のためにも、また後代における変容の過程をうかがう上でも、以下に関連する記述と現存遺物をまとめておく。

2-1. ロザリオ (コンタツ)

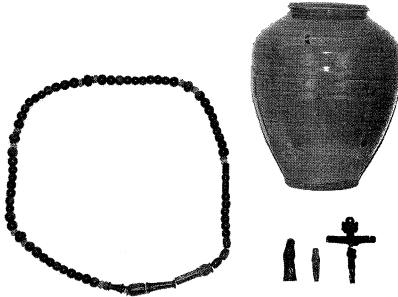


図3. ロザリオと壺（江戸時代。天草市立天草キリシタン館蔵）：崎津・小高浜の海岸工事の時、偶然発見されたもの。潜伏キリシタンの信仰に用いられたものと思われる。

キリシタン時代の信心具の中でも、ロザリオ（コンタツとも）はとりわけ強くもめられたものの一つで、天草においても、その用い方に関する多くの記録を確認することができる。

[1564年9月24日付平戸発フロイス書簡]

この世界で日本人ほどコンタツを尊び崇め、意味あるものたらしめる人は他にいないように思われます。人びとは一年前からコンタツを手に入れたいと絶えず口にし、激しく涙を流し、コンタツが手に入るようにと繰り返し祈りを捧げています³³。

[1582年度日本年報]

ドン・ミゲル [=天草鎮尚] は手を揚げて祈りを唱える習慣であったので、すでに息も絶え絶えに脈搏も止まろうとしたとき、聖遺物入れとイエズスのコンタツを手にして掲げ、絶えず聖なる御名を唱え、彼がこうして救いを求めることに助力しない者を叱った³⁴。

[1596年度年報「大矢野のレジデンシアについて」]

この肥後の国には、以前大なる権力を有したある貴人がいたが、彼には異教徒と結婚した娘があった。[中略] この娘が突然病気になる、六日も経ないで今にも死にそうになった [中略] 父親はただちにすべての仏僧と寝所に詰めていた他の異教徒たちに遠ざかるよう命じ、自分はロザリオを

手に取って「主祷文」と「天使祝詞」を三回唱え始めた。その間娘は少しも容態が変わらず、むしろ以前よりはずっと恐ろしく凶暴になったため、大勢の人々でも押えることができぬほどであった。父親はロザリオの助けを求めて、それで娘の背中を、こう言いながら叩いた。「お前が悪魔の一人であることは私には見えすいている。この身体から出ていけ」と。すると悪魔はこう答えた。「おれは出て行かぬ」と。父親は徳に秀でた人であったので、ロザリオを彼女の首にかけて、こう言った。「(悪魔よ) お前は望もうと望むまいと出ていけ」と。すると悪魔はこういった。「ロザリオがおれの首にくい込むから、ロザリオを除けよ、そうすればおれは出ていこう」と。父親はそこでこう答えた「私は決して(ロザリオを) 除けぬ」と。それどころか彼は数本の綱を取って来て、自分が(悪魔)を叩いてやると脅迫すると(悪魔)はその時に出て行った。[中略] 娘は二時間後には、何の叫びも発していなかったのに、息を吹き返して水を求めた。父親は水を与える前に、三回「主祷文」と「天使祝詞」を唱えた³⁵。

[1609、1610 年年報「天草島の志岐、上津浦、崎津のレジデンシア」]

或る女の忍耐力は称えるべき例となった [中略] 彼女は真の信仰について非常に堅固な考えを持っていたが、娘は異教に身を委ねていた [中略] いつも母親の悪口を言い、あらゆる機会をとらえて母親を嘆かせるようなことをした。そして或る日我らの一司祭が母親に与えたロザリオと聖遺物入れを [その娘は] 密かに盗み出した。母親はそれらを失ったことを激しく嘆き、キリシタンが常に携えるべき印しを携えずに教会へいく勇気がもてなかった³⁶。

2-2. メダイ、メダリオン

キリストやマリア、あるいは諸聖人等の図像を描いたメダイやメダリオン(メダル。ヴェロニカとも)も、ロザリオと同じく、キリシタン時代の信徒らに強くもとめられた信心具であった。天草における具体的な事例については以下のとおり。

[1596 年度年報「大矢野のレジデンシアについて」]

私 [=フロイス] がある城下から他の城下に向かう途中で、多数のキリシタンたちが私を出迎えたが、彼らの中に立派な服装をして馬に乗った十歳の

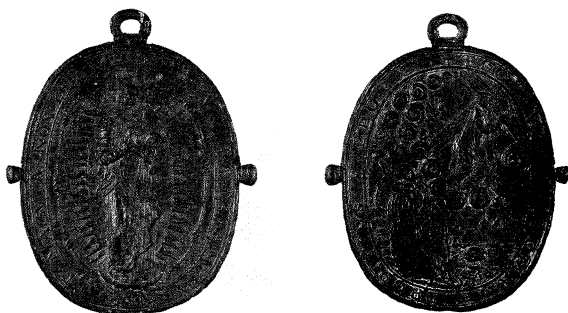


図4. メダリオン（表および裏面。17世紀。天草市立天草キリシタン館蔵）：崎津に伝来。片面に「無原罪の聖母」とラテン語の銘文「愛しい人よ、あなたはなにもかも美しく、傷はひとつもない（雅歌 4:7）」を刻する。



図5. 聖イグナチオメダル（表および裏面。17世紀。天草市立天草コレジヨ館蔵）：白蝶貝に聖イグナチオ肖像を刻む。崎津の潜伏キリシタン伝来。長崎 26 聖人記念館にも同種のメダルが現存する。

少年がいた。[中略] 聖なる信仰の簡単な教理を授けた後、彼に洗礼を授けることとなり、そのように行われた。それから彼は私にアグヌス・デイ [=キリストのメダイ] を求めたが、両親の手に取り上げられるのを恐れてそれを拒んだ。しかし彼はその後、自分で方法を考え熱心さによって他のあるキリシタンから入手した。彼はそこから、両親が禄を得ていた町に赴いて、彼らが知らぬ間に神の諸々の社を焼き、仏の像を毀して火に投げ入れた。両親はこの珍事によって十歳の少年に対してひどく驚き、彼が神と仏に対して何と何をしたのか、またどんなに重い罪を犯したか知っているのかと詰問した。少年はまったく平然としてこう求めた。自分は何

ら悪事を行ったのではないから、(両親)は何も心配することはないように。(両親)が崇拝している私は悪魔であり、またそれに類似したものと見なすべきである。自分は(両親)が福音の説教を聞いて、聖なる洗礼を授かることを願っていると。小さな息子のこの言葉は大きな効果があり、(両親)は福音を聞こうと答えた。少年が隠して首に吊るしていたアグヌス・デイを彼らに見せると彼らは非常に感嘆した³⁷。

[1606、1607年日本の諸事「有馬とその地区での注目すべき出来事およびその他の教化的な諸事について」]

司祭は、[異教的儀式を行って病人を治療している老婆に]所持している聖遺物入を見せてもらいたいと言った。そして、それを手に取ると、すでにひどく古い木綿の布の小さな袋が中にあり、その中に、紙で包まれた聖遺物があった。その紙を広げると聖遺物とともに、我らの言葉で「十字架の木」(Lignum Crucis)と書かれていた。その紙をさらに開けると、中に、「アグヌス・デイ」に相違ない綿にくるまれた黒い蠟のようなものと、一方に御胎りの(聖母)マリア、他方にキリスト磔刑の図と、陽光の描かれている錫のヴェロニカがあった。司祭は驚き、次のように考えるほかなかった。それらは、福者メストレ・フランシスコ(・ザビエル)師が、洗礼を授けた際に、両親が親族に与えた聖遺物であり、彼らの死によって娘に残し、その聖なること、それらを与えた人の聖なること、病人を癒やし、その他同様の奇跡をもたらす力を持っていることを教えた。それゆえ、この善良な老婆がしているように、虚心に、その力を信仰し信頼してそれらを用いると、我らの主は、そのような業において、異教徒ながら彼女を助け給い、病人たちに健康を与え、これによって聖なる遺物の力と、それを与える人の聖なることを表明し給うのである、と³⁸。

2-3. 苦行(鞭打ちなど)

キリシタン時代天草の信徒が、鞭打ちなどの苦行を行っていたことを示す記録も多く見られる。

[1596年度年報「大矢野のレジデンシアについて」]

聖週間の諸曜日には、彼ら [=大矢野のキリシタン] は自分の肉体に血が出るほど鞭打ちの苦行を加え、また多くの痛悔の行を行った³⁹。

[1596 年度年報「志岐のレジデンシアについて」]

彼女 [=日比屋了荷ヴィセンテの夫人・アガタ] はその順序に従って、自分からすべての婦人たちといっしょに毎日朝、昼、夕方の三回、祈祷に従事するようすべてを整えた。彼女は夜には良心の糾明後に礼拝所で跪いて連祷を唱え、すべての婦人たちがこれに唱和した。彼女は毎日ミサ聖祭に与かり、何か靈的読書や聖人伝を読んだり聞いたりした。彼女はたびたび告白と聖体拝領をし、他の己が仲間たちにも同様にすることを望んでいた。彼女は金曜日には鞭打ちの苦行を行い、また断食していたが、他の多くのことも信心から行っていた。彼女は聖週間中には、密かに血が出るほどの鞭打ちの苦行をしていたので、まったく控え目するように忠告せねばならなかった。[中略] 四旬節の全期間中は聖週間と何ら異なることはなかった。なぜなら彼ら [=志岐の人々] は、金曜日だけでなく一週間のうちたいていは血が出るほどの鞭打ちの苦行を行ったからである。少年たちにいたるまで皆がさまざまな種類の苦行を自発的に行った。或る人々は自分の体を十字架に縛りつけ、また両腕に二個の石を吊るして歩いていくのが困難なようにした。他の人々は教会の敷居に身を伏せて、入ってくる人々の足で踏まれるようにした。特にこのようなことをすることを、誰も彼らに教えたわけではないので、これは多くの人々に大きな驚きを与えた⁴⁰。

[1603、1604 年日本の諸事「天草、志岐の諸島のキリシタン宗団の出来事について、彼らが受けた大迫害」]

先の四旬節の際に教会に見られた大いなる敬虔さと人手がこのこと [=寺沢による諸教会の破壊] を予告していたように思われる。その週の3日間、多くの村落で(人々)はたびたび教会に通い、教会に集まって鞭打ちの苦行をし、贖罪として裸足で十字架から十字架へと巡礼し、まるで事前にそれらに告別していたかのようであった⁴¹。

2-4. 葬儀について

キリシタン時代の天草では、信徒が亡くなった際、教会の香部屋係がその埋葬に携わっていた。そうした人々の存在は、現存するキリシタン墓碑群の成立とも関係していたものと推定される⁴²。

[1603、1604 年日本の諸事「天草、志岐の諸島のキリシタン宗団の出来事につ

いて、彼らが受けた大迫害]]

[寺沢は] 死者の埋葬を仕事としている教会の香部屋係は今後、もはや埋葬をしてはならず、誰かが死亡した場合には、そのために自分が委嘱した仏僧を呼んで埋葬するようにとの布令をただちに出させた⁴³。

[1611 年年報「天草諸島のレジデンシア」]

7 歳になる少年が瀕死の状態に陥っていた。母と祖母、その他の身内の人たちは（デウスの）恩寵を求めるでなく、自然のなすがままに、何も判らぬまま世俗の祈祷にすがり子供の救いを求めていた。このようにして何の御利益もなく、異教の慣習に従って埋葬するつもりでいた。ところが、この瀕死の少年はこうした扱いを耳にすると全力をふりしぼってこう言った。「僕はイエズス・キリストを信じて死ぬのですから異議があります。葬儀については教会の香部屋係のお世話になりたい [少年はその人の名を挙げた]。また、お母さんとおばあさんは自分のしたことを十分承知しているのだから、僕の言うとおりにふさわしく悔い改め、伴天連様のもとへ行って許しを請うてください」と⁴⁴。

2-5. 漁の神

潜伏期の崎津キリシタンは、デウスを漁の神として奉じ、魚肉やタイラギ・アワビ等の貝類を捧げていた。キリシタン時代においても、天草の漁民らがキリシタン信仰と漁の成功との間に関連性を見出していたことを示す記録が見られる。

[1596 年の年報「志岐のレジデンシアについて」]

既述の漁夫たちは貧しくて、また本性が素朴であるため諸祝日にも漁をする習慣であった。このことについて彼らは忠告を受けた時、家計の貧しさのためにそれをやめなかった。それが（祝日には）まったく魚が獲れなかったのに、平日には他に見られぬほどの大漁であったので、これが理由で彼らは以前より信心深くなり、また諸祝日を祝うことにはいっそう信仰を篤くした⁴⁵。

[1625 年の年報「天草のレジデンシアと肥後地方の宣教」]

天草の漁師等は捕鯨で有利な多量の現金収入があったが、なに一つ獲物が

なくて一月を過ごしていた時、管区長のパーデレがその地方の住民に送ったフランシスコ・ザビエルの像を持ってパーデレが来たので、漁民たちはその神父の元に集まってきた。漁師等の悩んだ顔を見て、その原因を尋ねたので、その訳を訴えた。パーデレは聖人の画像のもとに彼等を導き、聖人を讃えるための祈りを5回、同じ回数だけアヴァ・マリアを唱えた後に漁場に行くように勧めたところ驚くほどの大漁であった⁴⁶。

2-6. 聖水

[1596年の年報「志岐のレジデンシアについて」]

悪魔はある迷信的な呪術の後に、或る女に当然乗り移った。しかし彼女がひどい苦痛のため鋭い叫び声を出したので、悪魔は去りはしたものの彼女はほとんど死んだように横たわっていた。そこで悪魔祓いが行われて聖水が彼女に注がれると、彼女は正気に戻り、過去の生活の諸罪科を痛悔することによって、それ以後は悪魔のすべての災いを逃れた⁴⁷。

[1611年年報「天草諸島のレジデンシア」]

聖水を飲んで多くの信者が三日熱から救われていた。聖水は通常三日熱の治療に用いられていた。また教会で一晩中寝ずに祈りを捧げ我らの主によって健康を回復した者もいる⁴⁸。

2-7. 祝別された蠟

[1609、1610年度年報「天草島の志岐、上津浦、崎津のレジデンシア」]

これらのレジデンシアについての報告を終わるにあたって、アグヌス（・テイ）の力を示す出来事について知るそう。或る日悪魔が、身分は高いが異教徒である婦人の身体に取り憑いた。異教徒たちは彼らの方法で悪魔をその女から引き離そうとしたが、何の成果も得られなかったので、仕方なしに病気に非常に効き目のある祝別された蠟を所持していることが知られていた一人のキリシタンを呼びにやった。この男は悪魔に取り憑かれた女の家に来ると、女の首にアグヌス（・テイ）と押し当てた。すると同席していた人々は驚き、家人は大喜びしたのだが、女が悪魔から解き放たれたのであった⁴⁹。

2-8. その他

[1596年の年報「志岐のレジデンシアについて」]

これらの村々 [=志岐近辺の村か] にはほとんど医者がいないので、人々は教会の世話をしているあるキリシタンの所へ最後には駆けつけて、彼から病気の治療薬をもらっている。彼は貧しい人々が非常な熱心さで救援を求めているのを見ると、或る人々に対してはデウスの慈善箱の助けを受けるのを認め、或る人々には聖水を少し飲んでから、或る幾つかの祈禱を唱えるように命じ、或る人々には数年以前に十字架が出現した樹木の小片を、水の中へ入れるように命じた。こうして3、4ヶ所の村々では2、30名の人々が三日熱の状態から完全に健康を回復した⁵⁰。

或る村では1人の田舎者が金曜日には肉を食べるなど忠告された時、彼は忠告を無視したために惨めにも木から落ちて、びっこになってしまった。村人たちはそのような原因を先に犯した罪のせいにした。他の或るキリシタンの村では、まったく信仰不熱心な生活をしていた3名の男に不幸な事件が起きた。1人は両脚を、1人は片腕をくじいた。3人目の男はひどい（身体）障害者になった。しかし彼らは皆、自分の罪を認めて生活を改めた⁵¹。

注

- 1 Luis Frois, *Historia de Japam*, edited and annotated by J. Wicki, 5 vols., [Lisboa]: Biblioteca Nacional de Lisboa, 1976-1984, vol. 2, pp. 148-152 [松田毅一・川崎桃太訳『日本史』全12巻（中央公論社、1977-1980年）、第9巻、267-276頁（第1部72章、1566年）] .
- 2 Frois (1976-1984), vol. 2, pp. 222-223 [松田・川崎（1977-1980）、第9巻、307-308頁（第1部81章、1569年）] .
- 3 *Ibid*, pp. 223-224 [同上、309頁] .
- 4 *Ibid*, p. 230 [同上、318-319頁] .
- 5 *Cartas que os Padres e Irmãos da Companhia de Iesus escreverão dos Reynos de Japão...des do anno do 1549 até o de 1580*, 2 vols., Evora: Manoel de Lyra, 1598, vol. 1, f. 416r [松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』（同朋舎出版、1987-1998年）、第III期第5巻、82頁] .
- 6 今村義孝『天草学林とその時代』（天草文化出版社、1990年）、31頁参照。
- 7 Josephus F. Schütte ed, *Introductio ad historiam Societatis Jesu in Japonia, 1549-1650*, Romae: Institutum historicum Soc. Jesu, 1968, pp. 429-431.
- 8 Alessandro Valignano, *Sumario de las cosas que pertenecen a la India Oriental y al gobierno*

- de ella* (1580), in Joseph Wicki ed., *Documenta indica*, vol. XIII (1583-1585), Romae: Institutum historicum Soc. Jesu, 1975, pp. 213-214 [ヴァリニャーノ著、高橋裕史訳『東インド巡察記』(平凡社、2005年)、184-185頁] .
- 9 天草コレジオの所在地が河内浦であったことについては、Schütte (1968), pp. 534-538; 松田・川崎 (1977-80)、第9巻、273頁、注3; 今村 (1990)、266-280頁参照。
- 10 John Hay ed., *De rebus Iaponicis, indicis, et pervanis epistolae recentiores*, Antuerpiae: ex officina Martini Nutij ad insigne duarum Ciconiarum, 1605, pp. 402-403 [松田ほか (1987-1998)、第1期第2巻、152-153頁] .
- 11 M. Antoni J. Üçerler, "Jesuit Humanist Education in Sixteenth-century Japan: The Latin and Japanese MSS of Pedro Gómez's 'Compendia' on Astronomy, Philosophy, and Theology (1593-95)", 上智大学キリシタン文庫監修・編集『Compendium catholicae veritatis III: 解説』(大空社、1997年)、11-60頁; 平岡隆二『南蛮系宇宙論の原典的研究』(花書院、2013年)、59-84頁参照。
- 12 Archivum Romanum Societatis Iesu, *Jap. Sin.* 12 I, ff. 178r-v [五野井隆史『キリシタンの文化』(吉川弘文館、2012年)、126-127頁] .
- 13 五野井 (2012)、183-186頁。
- 14 大塚光信「キリシタンの日本語研究」、『国文学—解釈と教材の研究—』第51巻第11号、2006年、60-69頁参照。同辞書の影印版に、福島邦道・三橋健解題『羅葡日対訳辞書』(勉誠社、1979年)がある。
- 15 土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』(岩波書店、1980年)、解題、9頁。
- 16 Fernão Guerreiro ed., *Relação anual das coisas que fizeram os padres da Companhia de Jesus nas suas missões do Japão [...] nos anos de 1600 a 1609*, 3 vols., Coimbra: Imprensa da Universidade, 1930-1942, vol. 2, p. 18 [1603、1604年日本の諸事。松田ほか (1987-1998)、第1期第4巻、196-197頁] .
- 17 Frois (1976-1984), vol. 5, p. 397 [松田・川崎 (1977-1980)、第12巻、131頁] .
- 18 Hay (1605), p. 413 [松田ほか (1987-1998)、第1期第2巻、166頁] .
- 19 *Ibid.*, p. 415 [同上、169頁] .
- 20 *Ibid.*, pp. 413-414 [同上、167頁] .
- 21 天草のコンフラリアについては、今村 (1990)、210-224頁および今村義孝『近世初期天草キリシタン考』(天草文化出版社、1997年)、60-89頁参照。また天草のコンフラリアにも影響を与えた可能性が指摘されている『高来に於いてパアデレ・ジャコメ・アントニヨ・ヂャノネの編める組の掟』については、Joseph F. Schütte (柳谷武夫訳)「二つの古文書に現はれたる日本初期キリシタン時代に於ける「さんたまりやの御組」の組織に就いて」、『キリシタン研究』第2輯、1944年、91-148頁参照。
- 22 Guerreiro (1930-1942), vol. 2, p. 21 [1603、1604年日本の諸事。松田ほか (1987-1998)、第1期第4巻、201頁] .
- 23 "Delle Residenze di Xiachi, e Consura nella Isole di Amacusa (天草島の志岐と上津浦のレジデンシアについて)", *Lettera annua scritta dal Giappone al P. Claudio Acquaviva, generale*

- della Compagnia di Gesu dell'anno 1605, in *Tre lettere annue del Giappone de gli anni 1603, 1604, 1605 e parte del 1606*, Roma: Bartholomeo Zannetti, 1608, p. 207 [今村 (1990)、218-219 頁] .
- 24 Pedro Morejon, *Relacion de la persecucion que vuo en la yglesia de Iapon y de los insignes Martyres, que gloriosamente dieron su vida en defensa de nra santa Fé, el Año de 1614 y 615*, Mexico: Joan Ruysz, 1616, parte 2, pp. 50-51 [ペドロ・モレホン著、佐久間正訳『日本殉教録』キリシタン文化研究シリーズ 10 (キリシタン文化研究会、1974 年)、166 頁]。
- 25 今村 (1990)、78-82 頁。
- 26 *Lettere annue del Giappone, China, Goa, et Ethiopia, scritte al M. R. P. Generale della Compagnia di Giesu da Padri dell'istessa Compagnia ne gli anni 1615, 1616, 1617, 1618, 1619*, Napoli: Lazaro Scoriggio, 1621, p. 43 [松田ほか (1987-1998)、第 II 期第 2 巻、232-233 頁] .
- 27 松田毅一『近世初期日本関係南蛮史料の研究』(風間書房、1967 年)、1101-1108 頁、とくに 1107-1108 頁。
- 28 *Relatione delle persecuzioni mosse contra la fede di Christo in varii regni del Giappone, negli anni MDCXXVIII, MDCXXIX, MDCXXX*, Roma: Francesco Corbelletti, 1635, pp. 178. [今村前掲書 (1990)、192 頁] . また以下の文献における類似の記述も参照。Matias de Sosa ed., *Compendio de lo sucedido en el Iapon desde la fundación de aquella christiandad y relación de los martires que padecieron estos años de 1629 y 30*, Madrid: Imprenta del Reyno, 1633, f. 25r [佐久間正訳「1629 年及び 1630 年に日本で起こったことの報告」、『キリシタン研究』第 14 輯、1972 年、338 頁] .
- 29 今村 (1990)、226 頁。
- 30 『乱後(寛永十五年三月十八日)富岡冬切にて処刑者名簿』、荅北町史編さん委員会『荅北町史：史料編』(荅北町、1985 年)、267-271 頁。天草・島原の乱についての近年の研究として、鶴田倉造著、上天草市史編纂委員会編『天草島原の乱とその前後』上天草市史・大矢野町編 3 (上天草市、2005 年)。神田千里『島原の乱：キリシタン信仰と武装蜂起』(中央公論新社、2005 年)。大橋幸泰『検証島原天草一揆』(吉川弘文館、2008 年)を挙げておく。
- 31 天草崩れと潜伏キリシタンについては、平田正範著、濱崎献作編集代表『天草かくれキリシタン宗門心得違い始末：平田正範遺稿』(サンタ・マリア館、2001 年) 参照。
- 32 今村 (1997)、59-79 頁；五野井 (2012)、230-231 頁参照。
- 33 リスボン科学学士院図書館 Biblioteca da Academia das ciencias, Lisboa (BACL) 蔵、*Cartas do Japão I*, f. 108 [五野井隆史「キリスト教布教とキリシタンの道具 (一)」、『英知大学キリスト教文化研究所紀要』第 20 巻第 1 号、2005 年、(1)-(23) 頁、特に (14) 頁] .
- 34 *Cartas* (1598), *op. cit.*, vol. 2, f. 48v [松田ほか (1987-1998)、第 III 期第 6 巻、85 頁] .
- 35 Hay (1605), pp. 405-406 [松田ほか (1987-1998)、第 I 期第 2 巻、155-157 頁] .
- 36 Giouan Rodriguez Girano, *Lettera annua del Giappone del 1609. e 1610*, Roma: Bartolomeo Zannetti, 1615, p. 84 [松田ほか (1987-1998)、第 II 期第 1 巻、146 頁] .
- 37 Hay (1605), p. 407 [松田ほか (1987-1998)、第 I 期第 2 巻、157-158 頁] .

- 38 Guerreiro (1930-1942), vol. 3, p. 171 [松田ほか (1987-1998)、第Ⅰ期第5巻、206-207頁] .
- 39 Hay (1605), p. 406 [松田ほか (1987-1998)、第Ⅰ期第2巻、157頁] .
- 40 Hay (1605), pp. 411-412 [松田ほか (1987-1998)、第Ⅰ期第2巻、163-165頁] .
- 41 Guerreiro (1930-1942), vol. 2, p. 21 [松田ほか (1987-1998)、第Ⅰ期第4巻、201-202頁] .
- 42 天草を含む、全国のキリシタン墓碑については、大石一久編、南島原市教育委員会企画『日本キリシタン墓碑総覧：南島原市世界遺産地域調査報告書』（南島原市教育委員会、2012年）参照。
- 43 Guerreiro (1930-1942), vol. 2, p. 22 [松田ほか (1987-1998)、第Ⅰ期第4巻、203頁] .
- 44 松田ほか (1987-1998)、第Ⅱ期第1巻、228頁。
- 45 Hay (1605), p. 413 [松田ほか (1987-1998)、第Ⅰ期第2巻、167頁] .
- 46 *Lettere annue del Giappone degl'anni MDCVXXV, MDCXXVI, MDCXXVII al molto Reu. in Christo p. Mutio Vitelleschi preposito Generale della Compagnia de Giesu*, Roma: Francesco Corbelletti, 1632, pp. 53-54 [今村 (1990)、199頁] .
- 47 Hay (1605), p. 414 [松田ほか (1987-1998)、第Ⅰ期第2巻、168頁] .
- 48 松田ほか (1987-1998)、第Ⅱ期第1巻、230-231頁。
- 49 Girano (1615), p. 90 [松田ほか (1987-1998)、第Ⅱ期第1巻、150頁] .
- 50 Hay (1605), p. 414 [松田ほか (1987-1998)、第Ⅰ期第2巻、167-168頁] .
- 51 Hay (1605), p. 414 [松田ほか (1987-1998)、第Ⅰ期第2巻、168頁] .